

テーマ：「外」から見る日本と台湾—ロシアを視座に—

第8回ワンアジア財団国際講座は本学日本語文学系の塚本善也副教授が担当なさった。塚本先生のご専門は日本とロシアの比較文化論と日台交流史であり、今回のご講座は主として台湾と日本とロシアの三ヶ国の交流史を通して、その他の国家を概観し、如何に日本を研究するか、その方法に及ぶものである。先生の講座の重点は以下の通りである。

塚本先生は先ず歴史的要素の影響を通して、台湾がユニークな日本研究を展開しており、台湾人もユニークな日本観を持っていると述べた。台湾で展開される日本研究は世界で唯一無二の学問であり、韓国で展開される日本研究や欧米で進められる日本研究もそれぞれに特色がある。これによって、台湾で進められる日本研究は韓国或いは欧米国家の日本研究の成果を正視する必要がある、常に外国の学問を通して見直すことが求められ、自らの研究方法の誤りや偏見を修正し、さらに日本を認識し直すことができる。これに対して、塚本先生は外からの視点によって、多くの者がロシアの日本研究、及び日本観を提示し、同時に台湾とロシアの関係を解説する。

ロシアのオリエント研究（東洋研究）の形成には三大要素の検討が必要になる。第一に、ロシアはシベリア開発の関係上、当地に住む異民族や先住民の風俗習慣を理解する必要があった。第二に、ロシアと地理的に隣接する中国・モンゴル・朝鮮と日本などのために、国土を取得し国境を画定するには遠東諸国間の自然が複雑に関係しており、サハリンの領土問題を最も重視した。第三に、イスラム諸民族と関係がある。オリエント研究の基礎はピョートル大帝が定め、彼の収蔵した非常に多くの貴重な文物のために博物館を設立し、「クンストカメラ (Kunstkamera)」(藝術室)にはグローバルな民族学、人類学関係の品々が収蔵されている。

台湾とロシアの関係は、1980年代に台湾経済が急速に発展した際にロシアが台湾に注目し始めた。1992年に台北とモスクワ間での経済文化協調委員会代表組織が設立され、その後、両国は相互に様々な分野で交流し協力関係を開始した。ロシアの学術史上、90年代から相互研究が発展する時代を迎え、いわば「ディスカヴァー・タイワン・イヤー」となったのである

この他、塚本先生はロシアの日本研究と台湾研究の関係も明確に説明し、台湾と関係するロシアの研究者を何人か紹介して更に説明を補充した。

先ずネフスキー（1892-1937、Nikolai Aleksandrovich Nevsky）は嘗て台湾の阿里山の「鄒族」部落に足を踏み入れ、一カ月の時間を掛けて、「鄒族」伝説を収集し、「鄒族」語を研究し、最も驚くべきことはネフスキーは僅か一か月間で「鄒族」語辞典を編纂したのである。

もう一人はエリセーエフ（Eliseev、1889-1975）で、彼は1908年から1914年まで東京に住み、東京帝国大学で日本古典文学と日本美術を研究し、その後アメリカのハーバード大学に招聘されて、「燕京」研究所の第一代目の所長となって、数多くの日本研究の専門家を育て、これによりアメリカにおける日本研究の先駆者と称された。実際にエリセーエフは嘗て1912年末から1913年初めまで台湾に来ており、基隆から高雄まで台湾本島を縦断し、身を以て台湾社会を観察した。その台湾旅行の間の原稿は2014年になって初めて発表され、その原稿が台湾総督府の抗日事件の処理方法を厳しく批判しており、それが陽の目を見る機会を遅らせた原因であって、エリセーエフは親日家であったため、彼が日本政府を批判したことは世の中の人々の注目の的となった。

最後に塚本先生はゴルヴァチョフ（Golovachev(中文名:劉宇衛))を紹介し、彼は日本研究専門家でもなく台湾研究専門家でもないが、ロシアがまさに台湾を研究し始めた1990年代後に改めて自ら台湾を来訪し、文献を通して台湾の研究ではない方式で身を以て観察し取材するという研究の潮流の代表者は、ロシア科学アカデミー東洋学研究所台湾研究センターの主要な台湾研究専門家に言わせれば、実にゴルヴァチョフをおいて他にいないと言えるそうである。

(ウェブサイト：<https://oneasia.pccu.edu.tw/faculty.php>)

(原稿作成：蔡珮菁・日文系副教授)

(翻訳：齋藤正志・日文系副教授)